歴史を訪ねて…

笠岡市の文化財

関鳧翁は笠岡が生んだ歌人であり国語学者です。江戸時代後期の人で、本姓を関藤、名を政方といいました。多くの歌集を出し、菅原神社奉納『梅歌千首集録』を編集したことでも知られています。福山藩で活躍した関藤藤陰は彼の弟で、敬業館二代目教授・小寺廉之は、いとこにあたります。

関藤政方は、天明六年（一七八六）吉浜村で生まれました。京都で医術と歌道を学び、文政元年（一八一八）、三十三歳のときに笠岡村の石橋町へ転居して医師を開業し、成功します。還暦の頃から鴨の羽毛入りの服を着用し、以後、鳧翁と名乗りました。万延二年（一八六一）、七十六歳で病没しました。

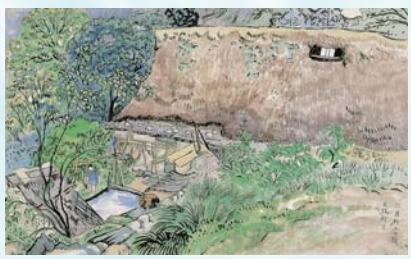
その墓は、彼が生前に定めていた場所、古城山西の麓につくられました。現在でも、西側の登山道登り口に、ひっそりと立っています。正面に「関鳧翁之墳」、向かって右側に簡素な略伝、左側に辞世の和歌「わか魂の行へはいつくしら雲のたたむ山べの松のした陰」が刻んであります。辞世の歌は、墓の場所を定めて二年後に書いた自筆のものを刻んだといわれ、その他は丸山株修の筆跡といわれています。

関　鳧翁の墓

市指定史跡

竹喬美術館みどころ 3

竹喬の挿絵と表紙絵



小野竹喬

<夏の五箇山1 大牧村にて>

大正5(1916)年

大正5年、竹喬は富山県の五箇山を訪れています。梅雨時の山中を徒歩でめぐり、温泉で知られる大牧周辺や合掌造りの家々などをスケッチしています。

この時のスケッチをもとにした絵に文章を添えて、「飛越山中」と題した紀行が大阪朝日新聞に連載されました。全十五回にわたる連載の中には、蓑を着た桑摘みの人々や、わずかな平地につくられた田んぼなど、当時の五箇山の様子を伝える絵も含まれています。

八十キロにもわたる旅程を通して描かれた数々のスケッチは、やがて国画創作協会展など展覧会に出品する作品にも活かされました。

今回の展覧会には、スケッチだけでなく当時の新聞記事もあわせて展示しています。

展覧会と行事のご案内

竹喬の挿絵と表紙絵

会期中～7月21日(月)
休館日 毎週月曜日
（ただし7月21日は開館）
開館時間 9:30～17:00
（入館は16:30まで）
65歳以上の人は入館無料です。

次回展覧会
国画創作協会の素描
7月26日(土)～10月5日(日)

〒714-0087
笠岡市六番町1-17
☎63-3967
ホームページ
http://www.city.kasaoka.okayama.jp/0013/0001.html

今月の表紙

6月8日、源平合戦に由来し、和船の漕ぎくらべをする金浦地区の伝統行事「おしぐらんご」（市重要無形民俗文化財）が金浦湾で行われました。

保存会のメンバーのほか、地元小・中学生、外国人が参加。威勢の良いかけ声をあげながら、力一杯に櫓を漕いでいました。

係から

「暑っぢぃ！」が挨拶代わりの季節となりました。暑さしのぎの方法は、人それぞれでしょうが、冷たいものを想い浮かべるというのは安上がりです。百年前の1908年、オランダ、ライデン大学のカマリン・オネスはついに、ヘリウムの液化に成功。その温度は実にマイナス268・9℃（4・2K（ケルビン））でした。その昔、酸素・窒素・水素などは、液化しない気体という意味で〝永久気体〟と呼ばれていましたが、いずれも二十世紀が始まるまでには液化され、最後に残ったのがヘリウムでした。（良）

発行日／平成20年7月1日
発行／笠岡市役所
編集／企画政策課
〒714-8601 笠岡市中央町1-1
☎69-2110

印刷／㈱国輝堂　☎67-5111

PRINTED WITH SOY INK
Trademark of American Soybean Association
※この広報は再生紙を使用し地球環境にやさしい植物性大豆油インキで印刷しています。